読み物

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌 2009年6月-2009年7月

初夏はアウトドアの季節。大日岳から、駒ヶ根、霧ヶ峰、果ては北海道まで飛び回る。もちろん、地元朝霧にも。楽しいイベントは運営も準備も楽しい。

▲地元立山ガイド組合の組合長多賀谷さんと、大日岳を歩く。「誰かがいかねば道はできない」

気分は柴崎芳太郎

6月4日

JR大人の休日倶楽部の最終回で、読図の屋外実技を実施。飯能市の多峯主（とおのす）周辺を歩いた。尾根・谷を図にしてもらったり、オリエンテーリング形式で最後の仕上げをしたりと、工夫はしたが、自主的な地図読みを意図したオリエンテーリングでは、講師からあれこれ言われないので、地図も見ずに黙々と前の人についていってしまう人多数。概ね参加者には満足してもらったようだが、どうすればもっと地図を読んでもらえることやら。

東京に出たついでに巣鴨のキャラバンと水道橋のさかいや寄って、ロゲイニングのビラを置いてもらう。

6月5日

冬山研修の安全確保のため、立山の大日岳稜線のＧＰＳ測位を行なう目的で東京から早朝の飛行機で富山に移動。

登山研修所の東さんとともにサポート役についてくれたのは、地元ガイド組合の組合長多賀谷さん。今や180万人を動員した日本映画久々の大作「劔岳＜点の記＞」の山岳監督を務めた方だ。この日はゆるゆると室堂に登り、山小屋で宿泊。

6月6日

室堂を３時に出発した。大日小屋に計画通り６時に到着し、その後大日岳、早乙女岳を経由して、冬山前進基地まで約10ｋｍの行程。

このエリアを知らない僕は、「後半はやぶこぎなんだ」くらいの認識だったが、東さんは「こんな仕事頼めるの、あんた（多賀谷さん）しかおらんわ」といい、多賀谷さんも、「この時期、あのルートに入るなんて、面白れえと思って引き受けたんよ」というほどの行程だと、山に入ってから知った。

測位の作業は順調に終了した。しかし、その先の藪こぎは想像を絶した。ハイマツ、竹藪、あらゆる種類の藪があった。やぶこぎはアドベンチャーレースで嫌というほど経験しているが、登山靴はトレランシューズより大きいから、藪にひっかかる。残雪部ではアイゼンに藪にひっかかって抜けない。測位中は、頭上30cmのところに出たどんぶりのようなGPSのアンテナが灌木にひっかかる。三重苦の藪こぎだ。

藪に加えて、下り基調の尾根は複雑に分岐している。地元に詳しいはずの二人ですら、夏場に入ったことはないルートだ。冬山の記憶とGPSを頼りに進むが、しばしば進路に悩み枝尾根に降りてはGPSで気づいて引き返す。いつの間にか斜面に降りてしまい、ササと格闘しながら尾根線に戻る。そんなことの繰り返しだった。GPSは現在地を確実に把握できるが、進路を維持するのは苦手だ。しかも、このあたりの高度で雲海に入ってしまい、視界が利かない。劔岳のキャッチコピーじゃないが、「誰かがいかねば道はできない」。地元最高のガイドにサポートされて、気分はほとんど柴崎芳太郎であった。

■GPSvs地図＋コンパス

GPSによる測位が終わると、僕は手持ちぶさたになった。東さんも多賀谷さんもGPSでのルート維持には苦戦している。こんなチャレンジが与えられる機会は滅多にない。東さんの地形図を借りてナヴィゲーションをすることにした。視界が不十分でも、高度計とコンパスがあれば地点の同定はできる。視界は悪くてもコンパスで正しい進路は分かる。そうやって進路を維持する作業は、パズルのようで楽しかった。

さすがに特徴のない地形が続くと不安になってGPSで位置を確認させてもらうが、難度の高い尾根分岐では、地図＋コンパスの方に分がある。東さんのGPSには10m等高線のデータが入っているので、基本的には情報量が変わらないはずだが、トレースの過程でほんの少しだけ等高線が丸められているせいなのか、隠れたピークを読み取りずらい。また、電子コンパスが入っていても、一瞬の動きの遅れが方向感覚を鈍らせる。GPSを持っている多賀谷さんと東さんが、時々僕に位置や進路の確認を求める。ナヴィゲーター冥利に尽きる一瞬である。過酷な藪漕ぎの中、ハイテク技術との力比べを楽しむとともに、GPSの強みと弱点がどこにあるのか、それを地図とコンパス、高度計でどう補えるのかを実践的に確認できた。考えてできる企画ではない。思わぬ副産物に、僕も東さんも大満足だった。

藪との格闘16時間で19時に下山。３人の一致した感想は「なんぼ金積まれても、二度とやらない。」でも、きっと新たなチャレンジが与えられたら、みんな「面白れえ」といって、似たような仕事をやるに違いない。

講習に思う

6 月 13 日

駒ヶ根ロゲイニングに向かう。元々この週末は「合宿」の予定だった。しかし講習や登山が一ヶ月以上続くと、たまの週末には休みたくなる。年寄り二人が日和って、土曜日はとにかく宿にいくだけ。余裕があったら、そこらを観光しようということになった。駒ヶ根での宿泊は、20 年以上前のインカレ運営で世話になった近藤夫妻がやっているペンションで、20 年ぶりにお二人に再会（その顛末は前号参照）。

6 月 14 日

「やっぱりロゲイニングはチームじゃなきゃ」という利佳ちゃんと、混合に出場。配点は単純で作戦も立てやすい。裾野エリアは 1.5 時間あれば回れるだろう。山のエリアはそれより若干時間がかかりそう。それで配点がほぼ同じなら、裾野をとって、余った時間で山のエリアに入る。山エリアは、下りのスピードも計算できるので、最後の時間調整もしやすい。図星の作戦で、男子でも３位に入る好成績

駒ヶ根ロゲイニングでは混合で優勝。

活躍した阿闍梨のメンバーたち。

6 月 20 日

県の体育協会の派遣で、某団体の国体強化選手対象のメンタルマネージメントの講習に出かけた。その中で目標設定のワークを行なった。目標を言えないアスリートはいないが、その目標に向けて自分にどんな課題があるのか、その解決のために何をしなければならないかを具体的に考えられるアスリートは少数派だ。

ある参加者が「体力を付ける」という課題に対して「休む」という対策をワークシートに記入していた。「自分で休む気になれば休めるんですか？」と問うと、「仕事上難しい」という。社会人ならそうだろう。そんな中で、どうしたら休めるのか。TV やマンガを見るのを止めるのか、あるいは上司に自分の立場を相談して、配慮してもらうのか、課題への具体的かつ実施可能な対応を考えて、初めて目標設定の意味が生まれる。メンタルマネージメントをやるたびに、その難しさと、そのような教育機会の不足を感じる。

6 月 26 日

数年前、ある人から、「実はアウトドアブームは終わっているということに、業界ではなっているんです」と聞いた。確かにそのころは、アウトドア界に一時ほどの勢いが無かった。ところが今やどうだ。トレランを核に、一時は若者絶滅の危機と思われていた登山界ですら若い女性が増えている。

北海道へ向かう途中の羽田空港の書店で目にしたターザンとｍｏｎｏマガジン、いずれもアウトドア特集で、トレランに多くのページを割いていた。

トレランバブルはまだまだ続くようだ。このバブルがどのように終結するのかを占ってみるのも面白そうだ。

6 月 28 日

27 日は朝から講習。人数は少ないがボーイスカウト関係の人が多いので、理解は早い。夕方は早めに終えて、山田君が渓流沿いにある露天風呂に連れて行ってくれた。緑の中の湯船が心地よい。

翌 28 日、講習二日目。昨晩の飲み会の効果か、受講者から気楽に質問がでる。質問から、新しい話題が広がる。講習の醍醐味である。オリエンテーリングの黎明期には、ボーイスカウトは熱心なオリエンテーリング実施者であったが、現在はボーイスカウト自体も右肩下がりで、オリエンテーリングとの関係も疎遠に感じる。あらためて普及へのアプローチを図るべき団体だと感じた。

北海道の講習会の合間に
渓流沿いの露天風呂で息抜き。

6 月 29 日

講習会の帰りに、ささやかな観光をした。講習会は登別で行なわれ、講習は 15 時に終わる。飛行機が 19:05 分。4 時間の間にどこか観光したいところないですか、と問われ、「有珠山！」と迷わず答えた。最近火山学者と協同研究する機会の増えた僕にとっては、有珠山は 2000 年の噴火の時に「ハザードマップによって住民の速やかな避難が可能であった」という、何度も引用した論文の一節で、北海道の火山の代名詞である。有珠山は洞爺湖の南、洞爺湖はルスツリゾートの南。従って、登別からちょこっと内陸に入ると有珠山にいけるイメージだった。

しかし、地図をみてびっくり。有珠山は登別から千歳とは反対方面に 50km 以上も行かなくてはならないのだ。「実はこの時間では結構無理があるんですよ。最初は拒否しようと思ったんですけどね」といいながらも、山田君は車を走らせてくれた。

2000 年の噴火では、水道に不具合が出て工事業者が重機を入れている最中に、その場所から突然噴火が始まった。現在ではここが西山遊歩道になっている。遊歩道から、むき出しの水道管と溶岩に埋もれた重機が見え、かつての国道も半分は埋もれ、半分は断層でずたずたになった虚無的な風景が見られる。

特別天然記念物の昭和新山は車窓からさくっとみて終わり。それでも千歳についたのはフライトの 20 分前だった。なんだか観光ばかりしていたような北海道行きだった。

女は地図が読めないか？

6 月 30 日

昨年登山研修所の研修会で取ったデータの分析を進めた。ナヴィゲーションに関する 18 項目からなる質問を統計的手法でまとめると、「地図・コンパスの携帯」「地形のイメージ」「ナヴィゲーションの読図」「コンパスの利用」「道迷い経験」という、納得できるカテゴリが抽出できた。しかも自己評価得点はこの順に下がる。つまりは持っていても理解は不十分で、ナヴィゲーションに使えるかとなるとさらに肯定的な回答は減り、コンパスはもっと使えないということだ。利用年数による変化もほぼこの逆になっている。当たり前のようだが、それが自己評価の質問紙できれいにでるのは、研究者としてぞくぞくする瞬間である。

オリエンティアから見れば、地図を使うのは目的地に速く正確に到達するために他ならない。そしてそのための

スキルを磨く。登山者にとっても、必要なことでありながら、その当たり前のことが認識されていないのだろう。
　スキルの自己評価・客観的なテストのいずれも、男女差のある項目は少なかった。特に主観的な質問紙で差がほとんどでなかったのは驚きだった。
　７月も末近くなって、アドベンチャーレーサーのスミちゃんが、ａｎ－ａｎのポスターのキャッチコピーを送ってくれた「地図くらい、読めないふりをしてあげよう」。本当は読める。でも読めないふりをするのも知恵！？

アウトドアパラダイス朝霧

7 月 3 日
　大学校内で、静岡オリエンテーリングクラブの納涼会兼ナイトオリエンテーリングをやった。大学といえどもその半分は林。ロブと僕の作ったスプリントマップで、本格的なナイトＯを楽しんでもらった。その後は納涼会。

7 月 4 日
　霧ヶ峰講習会。薄曇りの講習日和。17 人が参加したが、中には講師顔負けのレベルの人もいる。大会の時はあまり話ができないので、前日の講習会は、こうした熱心な参加者と交流するいいチャンスだ。またそれが、ロゲイニングの門戸も広げるはずだ。

7 月 5 日
　霧ヶ峰ロゲイニング。スタート時からやや不調感があった。前半は身体の動きはやや悪いが、途中は結構気持ちよく走れる。プランも 2 時間 15 分まではばっちり。しかし、逆にそれが仇となった。その後、南に下った踊場湿原を回ったが、帰りの 140m アップに、3 時間近く走った身体が対応できなかった。3 分 10 秒オーバーで 400 点減点。上皇島流し（前号参照）。
　その後は、元同僚のアウトドア好きの先生と待ち合わせて、白樺高原で「仕事」。やれやれ。

7 月 9 日
　藤枝の小学校で野外活動の危険認知についての授業を３時間行なう。子どもはきっと普段ではあり得ないくらい静かに聞いてくれ、熱心に質問紙に取り組んでくれた。彼らは危ないことを見つけることはできる。でもそれを適切に評価することはできない。なんでもかんでも危ないと考えてしまう。本当に危ないことが何かが分からなければ、いざという時に対処できない。そんな力を養うことが、学校での安全教育の目標のはずだ。オリエンテーリングや人生の中でも、同じような能力が必要なはずだ。

「たまには」仕事。藤枝の小学校で。

7 月 12 日
　宮内の同居人の佐藤さんとそのご主人白戸さんはバイオリンとコントラバスの音楽家夫妻である。絶対いいから演奏会を聞きに来いという宮内の誘いで、この日は昼過ぎまでサマーチャレンジの設置をして、宮内と演奏会デート。小さな教会堂で聞くコントラバスは迫力満点だった。

7 月 15 日
　朝霧トレランの開催等の打ち合わせ等で、朝霧野外活動センターへ。オリエンティアでも理解が難しいＳＩの使い方の講義を、総務課長の兵頭さんと担当の杉山さんがパソコンをいじりながら聞いている。講師を務めたサンスーシの大場さんも「楽しく過ごせて」「熱心に聞いてくれた」との評価。
　難問はいくらもあるし、彼らだってそれに悩まされている。でもそれを乗り越えて、新しいことに挑戦しようとする彼らと一緒に仕事をしていると、元気になれる。その後宮内を交えて、午前１時半まで大会の話に花が咲く。

トレラン大会に備えて、慣れないＳＩと格闘する朝霧野活センターのメンバーたち。

7 月 16 日
　あまりの肩の痛さに、なじみの接骨院を受診した。腕のいい院長さんのマッサージで痛みは引いたが、この１週間痛みが続いた話をすると、頸椎の問題を疑ったほうがいいという。翌日整形外科に行ってレントゲンをとってもらうと、案の定頸椎の椎間板が狭くなって、首の神経を圧迫しているのだろうという。ひどい状況ではないので、痛み止めと神経の修復作用のあるビタミン B12 を投与することになった。

7 月 17 日
　８月８日の森林公園のイベントで、エバニューを訪問する。担当の方はもちろん、社長の上田さん自らも参加される力の入れようだった。アウトドア部の課長さんと担当の方には「シルバコンパスのリングの中の度数の目盛り、何のためだか知っていますか？」と謎をかけ、上田社長には「シルバのあの解説書はダメです。ぜひ作らせてください」と直談判。あの解説書が日本の風土にあったものになったら、道迷い遭難も減るのではないかと、妄想（？）を抱く。

7 月 18 日
　愛弟子あかねちゃんの結婚式。彼女の結婚が公になり、相手が筑波出身の佐々木君だと分かった直後に全日本リレーがあった。茨城２走の佐々木君は、トップで、僕が１分半差の４位で出て行くという展開。ところが、僕が気負って２分以上のミス。ここで冷静に立て直せず、動転して更にマップアウト寸前で気づいて、更に２分近いロス。意気消沈して４番に向かうと、そこに佐々木君がいた。「なんとかなる！」そして次に思ったこと、「こんなオリエンテーリングが下手な男にあかねはやらん！」。是非夫婦揃って上を目指してほしい。

愛弟子、あかねちゃんの結婚式にて。

7 月 20 日
　宮内から「20 日空いてますか」、という電話があった。普通の女性なら「デートのお誘い！？」と、ワクワクするところだが、宮内ならもっと素敵な「山仕事」のお誘いにちがいない。案の定、朝霧野外活動センターの地図でＭＴＢ－Ｏのコースの地図を準備して持ってきてという話だった。彼女に頼まれたら嫌とは言えない。タカタッタの取材で精進湖登山道を走り、帰りに朝霧野外活動センターに寄って、マウンテンバイクＯを楽しむ。

ＭＴＢ－Ｏチームの最終合宿をサポート